

汚鬼の策略 ——小川国夫「キリガミロイ」の一考察——

櫻井 遼太

はじめに

カトリックのキリスト者作家・小川国夫（1927–2008）の創作のうち、聖書を題材にした作品群、いわゆる聖書系列作品にはキリスト教文学の根幹に関わるテーマが考えられる⁽¹⁾。悪ないし悪魔はこのテーマの1つであり、聖書系列作品の中では短編「キリガミロイ」（『血と幻』所収、1979年）がこのテーマを扱っていると言える。聖書系列作品の後期に書かれたこの短編において、小川は聖書に登場する悪魔ないし悪霊がモチーフと考えられる汚鬼という登場人物を軸に物語を展開している。そして、小川は「キリガミロイ」に登場する汚鬼の描写を通して悪魔とはどのような存在であり、何が特徴であるかを暴き出していると言える。本稿はこの点を明らかにすることを目的とし、ミドルトンの研究方法を適用して「キリガミロイ」に登場する汚鬼の分析に焦点を当てたい⁽²⁾。

汚鬼という名称はラゲ訳『新約聖書』（聖パウロ修道会、1960年）の「辞解」の中で「悪魔」の解説に用いられており、小川はこの名称を踏襲して聖書系列作品で悪魔をモチーフとする登場人物を汚鬼と設定したことが考えられる⁽³⁾。勝呂は汚鬼の存在によって「一つの宗教の誕生をめぐるドラマ」と考えられる聖書系列作品は「格段に深められることになった」と指摘する（勝呂、2014年、548頁）。しかし、先行研究では聖書系列作品における汚鬼の重要性が指摘されるにとどまり、汚鬼のモチーフと考えられる悪魔と関連させた汚鬼の表象に関する具体的な考察はなされていない。このため、本稿で取り上げる「キリガミロイ」もこれまで光が当てられてこなかった。一方で、「キリガミロイ」は聖書における誘惑物語と文学形式が類似しており、さらに、汚鬼が主要人物として登場するため、聖

書系列作品における汚鬼の特徴を考察する上で恰好の研究対象である。この短編に姿を見せる汚鬼とは巧みな話術で人を欺き、人を神から遠ざけようと誘惑する策略家である。「キリガミロイ」は聖書系列作品で汚鬼が主要人物としてもっとも活躍を見せる小品と言ってもよいだろう。この汚鬼の姿を本稿は追っていきたい。

悪魔をモチーフとする汚鬼をはじめ、キリスト教文学において悪ないし悪魔は作品に深みを与える小説の要素として見出すことができる。例えば、アメリカの作家フラナリー・オコナー（1925-1964）は自身の創作のテーマを「悪魔によって広く囲われている領域における恵みの働き」と述べており、この働きを描くために作品で悪に対する感覚を示す重要性を指摘している（O'Connor、1979年、118頁、本稿筆者訳）⁽⁴⁾。また、イギリスの哲学者ギブソンはドストエフスキー（1821-1881）やグレアム・グリーン（1904-1991）の文学を取り上げてキリスト者作家が悪の問題に向き合う重要性を強調している。ギブソンは「条理と不条理という安堵感の先にある不安な領域への気付きはキリスト者作家に期待されるべきである」と述べて、ドストエフスキーが創作を通してキリスト者の赦しの行為に含まれる欺瞞を追及した点を評価している（Gibson、1973年、58頁、本稿筆者訳）⁽⁵⁾。ただ、これらの指摘が悪ないし悪魔の要素を積極的なものとみなしていると理解しては主張の意図を取り違えてしまうだろう⁽⁶⁾。なぜなら、キリスト教文学における悪ないし悪魔は作家が作品の深みを志向する過程で看過できないものとして見出さざるを得ない要素だと考えられるからである。この点について、聖書系列作品も該当している。汚鬼は中期の聖書系列作品以降で登場し、しだいに同作品群に欠くことのできない存在となった⁽⁷⁾。したがって、汚鬼は聖書系列作品の深みの象徴であり、また、この汚鬼を考察することはキリスト教文学として聖書系列作品が持つ魅力に新たな光を当てることにつながると言えよう。

本稿は「キリガミロイ」に登場する汚鬼の分析に向けて、次のように議論を進める。はじめに、1章ではアメリカの文学研究者ミドルトンの研究方法とその課題を取り上げて、この方法を「キリガミロイ」の作品分析でいかに適用するか、本稿の方法論に関する議論を整理する。次に、2章では1章の議論を踏まえて「キ

「キリガミロイ」の作品外の要素と汚鬼の関係に焦点を当て、「キリガミロイ」以降の聖書系列作品内で汚鬼が台頭する背景を考察する。そして、3章では「キリガミロイ」の文学形式が聖書における誘惑物語と類似していることを示し、悪魔や悪霊に関連する神学的議論を取り上げた上で次の問いに取り組む。すなわち、汚鬼を通して悪魔に関して何が暴き出されているのか、この悪魔の表象はいかに考察できるか、具体的に検討する。

本稿の結論は以下の通りである。長編「ヨレハ記」の系列作品である「キリガミロイ」は黙示録的空間を強化したいという小川の創作上の課題と1970年代後半の日本や世界の情勢を背景として生み出された作品である。この2つの背景から、汚鬼は混沌を生み出す登場人物として聖書系列作品に姿を現す。そして、「キリガミロイ」で汚鬼はパロイのプライドや嫉妬を刺激し、悪化させ、神に敵対するよう巧みに語りかけ、歪んだ自己像を植え付けた末にパロイを誘惑することに成功する。この誘惑の手口は汚鬼の策略と換言でき、また、この汚鬼の描写を通して小川は悪魔の諸相を暴き出していると言える。このように、「キリガミロイ」は汚鬼の姿が丹念に描き出されている小品であり、汚鬼の誘惑の勝利が描かれている。しかし、この汚鬼の勝利を通してこそ小川は悪魔の手口に光を当て、聖書系列作品にさらなる深みを与えるとともに、悪なる存在といかに向き合うかという省察へ読者を導いていると言えるだろう。

I. ミドルトンの研究方法と課題

1. マッピング機能

アメリカの文学研究者ミドルトンはニコス・カザンザキス（1883-1957）や遠藤周作（1923-1996）をはじめ、多数の文学作品を神学と文学の接面領域の観点から研究している⁽⁸⁾。ミドルトンは「さまざまな作家を介して神学の教義に取り組むこと」と自身の研究を説明し、この作業には教義を図式化する「マッピング機能」があると指摘している（Middleton、2008年、10頁、本稿筆者訳）。例えば、グリーンの『情事の終り』（*The End of the Affair*）においてイギリスの神学者ニュー

マン（1801-1890）やオーストラリアの作家フォン・ヒューゲル（1796-1870）の神論がどのように具体化されているか、同作品を物語論の方法で読み解き、論じている。

「マッピング機能」と呼ばれる、文学作品を通して提起されている神学的要素を論点とするこの研究方法は従来のキリスト教文学研究にみられる手法を周到に避けている点が特徴である⁽⁹⁾。これは、次の2点をミドルトンが考慮しているためだと考えられる。1つ目は解釈の恣意性の問題である。ライケンが「文学愛好家のキリスト教信者はあまりに頻繁に彼等の愛するすべての文学作品に洗礼を施そうとする」と指摘するように、文学作品の特徴と神学の一致点を論じる研究はしばしば曲解が起りやすい（Ryken, 2002年、30頁、本稿筆者訳）。この点をミドルトンは警戒しており、神学に一致する特徴を抽出する対象として文学作品を論じることは「良くて見せ掛けの解釈であり、最悪の場合、誤解を招く」と指摘している（Middleton, 2008年、10頁、本稿筆者訳）。この一方で、「マッピング機能」、つまり、文学作品で神学的要素として何が提起されているか、この点を検討するためにはまず文学作品を読み込む作業が求められる⁽¹⁰⁾。これはミドルトン自身の言葉で次のように説明されている。

この方法は、まず、小説をそれ自体の位相において読み解くことを要求する。この上で、プロット、イメージ、性格描写、表象という小説内のさまざまな特徴が組み合わさってどのように神学的な省察を刺激し、あるいはむしろ、誘発しているかを検討する。

（Middleton, 2008年、6頁、本稿筆者訳）

「刺激」や「誘発」という表現が示唆するように、ミドルトンは正統的な教義から逸脱していると考えられる神学的な要素も視野に入れている。この点に解釈の恣意性を回避したいミドルトンの意図が表れている。つまり、ミドルトンの問いは文学作品の特徴が教義と一致するかではなく、文学作品の特徴はどの程度キ

リスト教的であるか、正統的な教義から逸脱する要素も含めて検討する作業だと
 言えるだろう。そして、この前提には文学研究として作品を読み解く作業がある。
 これら2つの作業が組み合わされて解釈の蓋然性を高めることにミドルトンの狙
 いがあると言える。

ただ、これはミドルトンが正統的でない神学的な要素を好意的なものとして受
 け容れているというわけではない。文学作品の特徴が教義と一致するかという問
 いでは捉えられないこの要素の役割を新たに見出したいというミドルトンの意図
 が考えられる。ここに「マッピング機能」を特徴とする研究方法をとる2つ目の
 背景がある。例えば、一般に異端的と理解されやすいグリーンやカザンザキスの
 作品は「恐れおののきつつ信仰を生きようとする者」を励まし、そのような読者
 の聖書的な信仰の成長過程に貢献するとミドルトンは主張する（Middleton、
 2008年、2頁、本稿筆者訳）。たしかに、キリスト教文学研究には読書を道徳的
 な行為とし、文学作品で表現されている内容に慎重な立場もある⁽¹¹⁾。しかし、
 教義と一致するか否かという二分法を避け、神学的な要素の諸相を明らかにする
 ためにテキストを注意深く分析するとき、グリーンらの作品は信と疑の間を生き
 る者に示唆を与えるものとして見出すことができる。さらに、ミドルトンの研究
 方法はキリスト者作家の作品に限らず、さまざまなテキストを通して神学的な要
 素を探究することができる可能性も示している。「肝心なのは、概して、私は小
 説家らを市井の人々と同じように理解しているということだ——その人々の生活
 や仕事が何か超越的なものに心を開かせる可能性を持つ者、いわば、キリスト者
 のような人として捉えている」とミドルトンは述べている（Middleton、2008年、
 210頁、本稿筆者訳）。ミドルトンが念頭に置いているのは文学作品を通して神学
 的な要素を議論できる、あらゆる立場の読者に開かれた批評空間である。このよ
 うに「マッピング機能」を特徴とするミドルトンの研究手法は解釈の恣意性の問
 題という課題を深く考慮しており、「キリガミロイ」における汚鬼の表象を分析
 する上で有効な方法論であると考えられる。さらに、この研究手法はさまざまな
 人に意義あるものとして文学作品にみられる神学的な要素を見出すという新たな

研究視角を開いている点で、汚鬼の表象分析を狭義の神学的な議論へ方向付けるのではなく、より広い議論に関連付ける可能性を与える意味においても有益である。

2. ミドルトンの研究方法の課題

本稿は前節で取り上げたミドルトンの研究方法を「キリガミロイ」の分析に適用するが、この方法は次の点に検討事項が残されている。すなわち、この方法では作品の置かれている社会的文脈や作家の情報があまり触れられない点である。前節で整理したように「マッピング機能」を含むミドルトンの研究方法は物語論の手法を通して得られた文学作品の神学的な要素を検証することが趣旨である⁽¹²⁾。このため、分析は作品の語りや構造の特徴を中心とする反面、神学的な要素を除く作品外の要素が考察に入りにくい。しかし、キリスト教文学研究で作品外の要素は神学的な要素の理解に効果的な示唆を与えることが指摘されている⁽¹³⁾。このことから、作品外の要素を含めてミドルトンの研究方法を適用することで「キリガミロイ」に登場する汚鬼を多角的な視点から捉えられると言えよう。いかに作品外の要素を分析に加えるか、この問いはミドルトンが遠藤文学を論じる場合にも該当する課題である⁽¹⁴⁾。

作品外の要素には作品の書かれた時代の社会状況や作家の伝記的な情報などが挙げられる。このうち、フェレットは作品の書かれた時代の社会的ないし経済的状况に着目し、文学作品を通して神学的な要素を考察する前提としてこれらの状況を踏まえる重要性を指摘している。この指摘はミドルトンの研究方法では捉えにくい論点に注意を向けさせると言えよう。つまり、作品が生み出される社会的状況とは何か、特に、作品を通して提起されている神学的要素とこの文脈はどのように関係しているかという点である。マルクス主義批評をはじめ、現代の文学批評に耐え得るキリスト教文芸批評を目指し、フェレットは「文学作品の世界を規定する特定の原理構造と価値」の解明を研究の起点とする（Ferretter、2003年、189頁、本稿筆者訳）⁽¹⁵⁾。この「特定の原理構造と価値」に作品内外の要素が想定されており、物語論を通して得られる要素に限定されていない。フェレットの

指摘は作品外の要素が神学的な要素の理解を深化させるだけでなく、神学的な要素を文学研究として扱う上で作品外の要素に着目する必要性を示唆している。

そこで、本稿はフェレットの指摘を考慮した上でミドルトンの研究方法を用いる。すなわち、はじめに作品外の要素として聖書系列作品における「キリガミロイ」の位置を整理し、また、「キリガミロイ」で汚鬼が主要人物として登場する背景を同短編が刊行された時代状況と合わせて検討する。この上で、「キリガミロイ」に登場する汚鬼の具体的な分析に移りたい。

II. 「キリガミロイ」の位置と同短編で汚鬼が主要人物として登場する背景

1. 聖書系列作品における「キリガミロイ」

「キリガミロイ」は後期の聖書系列作品の短編集『血と幻』（小沢書店、1979年）に所収されている。収録作品のうち「キリガミロイ」を除く他の5編は旧稿を修正したものである。例えば、「マンドラキ」の初出は『青銅時代』第3号（青銅時代社、1958年）であり、『血と幻』で新たに発表されるまで約20年が経過している。このように『血と幻』の特徴は修正された既出の作品を中心に構成されている点である。勝呂はこの特徴について『或る聖書』（筑摩書房、1973年）の構想と関連させて、「『血と幻』は『或る聖書』を補完し、その占める位置を定めるために取り組まれた」と指摘している（勝呂、2009年、86頁）。たしかに、収録作品「光と闇」は『或る聖書』の前史と位置付けられる「イシュア前記」（『文藝』1月号所収、1976年）の改稿が認められることから、『或る聖書』を補う作品の1つと言えよう。ただ、「キリガミロイ」には『或る聖書』あるいは同作品から派生した既出の作品を発展させた跡はみられず、むしろ、『或る聖書』以後に小川が着手した長編「ヨレハ記」の系列に属すると言える⁽¹⁶⁾。この点に関して、勝呂は「キリガミロイ」は「『ヨレハ記』に繋がる予言者の現れるまでの隠れた歴史の一齣」と述べている（勝呂、2012年、280頁）。

また、「キリガミロイ」が「棗椰子の林」（『すばる』1月号所収、1984年）と「神に眠る者」（『すばる』10月号所収、1984年）の連作と関連する点も勝呂により指

摘されている。勝呂は「「棗椰子の林」に見る人間への神と汚鬼の働き、「神に眠る者」に見る「殺す者」と「神に眠る者」との対立の構図」が連作の特徴として挙げられると指摘する（勝呂、2012年、300頁）。ここで着目されるのが「キリガミロイ」から引き継がれ、これらの連作で強化されている小説の要素である。つまり、神の側に属する人物と汚鬼に憑かれる人物という対立構図である。たしかに、「キリガミロイ」以前の『或る聖書』にも汚鬼は登場するが、〈あの人〉を描き出す小説の構造に組み入れられており、〈あの人〉と汚鬼に憑かれる人物の対立構図は主眼に置かれていない⁽¹⁷⁾。一方で、「棗椰子の林」と「神に眠る者」で「キリガミロイ」の主要人物であるキリガミロイとパロイが再登場し、神に属する人物（キリガミロイ）と汚鬼に憑かれる人物（パロイ）という対立構図が鮮明になる。例えば、「棗椰子の林」では「キリガミロイ」においてパロイが汚鬼から誘惑を受ける背景が語られ、さらに、汚鬼から誘惑を受ける人物としてヤナクが登場する。これら汚鬼から誘惑を受ける人物らは「棗椰子の林」の末尾で殺害されるキリガミロイ、つまり、神の側に立つ人物と対置させられている。また、「神に眠る者」ではキリガミロイの精神的な成長が語られ、指導者ジハとキリガミロイの交流に焦点が当てられるが、同小説末尾で悪魔の存在が示唆され、キリガミロイと悪魔の対立も暗示されている⁽¹⁸⁾。このように「キリガミロイ」以降の連作において神の側と汚鬼の側、それぞれの人物の対立構図が明確になり、この過程で後期の聖書系列作品のテーマに汚鬼が深く関わるようになっていく。川西も「棗椰子の林」と「神に眠る者」の後に発表された長編『王歌』（角川書店、1988年）について「国夫は人々の心に宿る汚鬼を深く掘り下げて書いた」と指摘している（川西、2013年、218頁）。これらのことから、「キリガミロイ」は長編「ヨレハ記」の系列に属し、聖書系列作品において汚鬼が作品のテーマに深く関わり始める位置にあると考えられる。敷衍して言えば、「キリガミロイ」は聖書系列作品における汚鬼の原型を蔵する小品である。この短編に着目することで「キリガミロイ」のみならず、聖書系列作品に登場する汚鬼の全貌を知る手掛かりが得られるだろう。

では、「キリガミロイ」において汚鬼が主要人物として登場する背景に何があるだろうか。この点を次節で検討したい。

2. 「キリガミロイ」で汚鬼が主要人物として登場する2つの背景

「キリガミロイ」は長編「ヨレハ記」の連載が終わった翌年に書き下ろしの短編として『血と幻』で発表されており、前述したように「ヨレハ記」に属する物語とみなすことができる。小川は「宗教はなぜ発生してきたのか、宗教は人間の外からくるのか、心の奥からくるのか、その両方からくるのだとすれば、その関係はどうなっているのか」という問いを立てて「ヨレハ記」に取り組んだと述べているが、その成果に満足していない心境を連載後に明かしている（小川、1977年、夕刊5頁）⁽¹⁹⁾。小川はこの不満の内容について言及していないが、「ヨレハ記」の連載を終えるにあたり朝日新聞に寄せられた次の記事が考察の手掛かりとなる。「ヨレハ記」に関して「この仕事もまた楽しいような苦しいようなことであった」と総括した後、小川は次のように付け足している（小川、1995年、520頁）。

今、その苦しみの一つについて書いておくと、それは周囲との違和感だ。町へ出ても勿論、黙示録的でもないし、呪術空間的でもない。建物も乗り物も、聞える言葉もすっきりと機能的だ。着想のせいで、私の小説世界はとりわけ密室であった…… [略] ……その間、自分にいい聞かせてきたのは、黙示録的空間も呪術的空間も無くなってしまったわけではなく、行方不明になっているだけだ、という暗示であった。

（小川、1995年、520頁）

「黙示録・呪術空間への関心」と題されたこの記事で小川は「キリストがどのような地帯で布教していたかということが如実になる場面」を黙示録的ないし呪術的空間と称し、「ヨレハ記」を執筆する中でこの空間に関心を寄せていたと述べている（小川、1995年、519頁）。「宗教はなぜ発生してきたのか」という小川

の問いを踏まえると、小川はこの黙示録的空間を作品内で生み出すことを念頭に置いて「ヨレハ記」を執筆したと言える。たしかに、「ヨレハ記」に登場する予言者ヨレハとヨレハをめぐる出来事は黙示録的空間を作り出す小説の要素として見出すことができる。そして、「キリガミロイ」にも予言者キリガミロイが主要人物として登場することから、この空間が「キリガミロイ」に継承されていると言えよう。ただ、注意したいのは同記事で小川が黙示録的空間に関連させて悪霊や悪魔に言及しているにもかかわらず、「ヨレハ記」では汚鬼が主要人物として取り上げられていない点である⁽²⁰⁾。この食い違いは「キリガミロイ」で汚鬼が主要人物として登場する背景を考察する上で示唆的である。つまり、悪魔は「ヨレハ記」で十分に取り上げられなかった黙示録的空間に関わる要素であり、悪魔への言及はこの要素に対する小川の関心の高まりと考えられる。換言すれば、小川は汚鬼を主要人物として「キリガミロイ」で登場させることで「ヨレハ記」から継承されている黙示録的空間を強化することを意図したと言えよう。なぜ「ヨレハ記」で小説の要素として悪魔を満足に扱えなかったか、この理由は同長編の執筆方針が旧約聖書をもとに物語を構想することであることと関係しているだろう⁽²¹⁾。

また、同記事で小川が黙示録的空間に関して「行方不明になっているだけだ」と述べている点も着目したい。もともと黙示録的空間は聖書の場面を想定しているが、この空間を「ヨレハ記」で作り出すにあたり、小川は黙示録的空間と「ヨレハ記」の書かれた時代状況との齟齬を感じ、「周囲との違和感」と表現している。そして、「行方不明になっているだけだ」という言葉にはこの齟齬を乗り越えて黙示録的空間を同時代に見出そうとする小川の態度が表れている。このことから、黙示録的空間とは聖書ないし「ヨレハ記」の作品内空間に関わるだけでなく、この長編が書かれた1970年代後半、つまり、高度経済成長期後の日本の社会状況も視野に入れた言葉だと考えられる。これらの社会状況が「キリガミロイ」で主要人物として汚鬼が登場するもう1つの背景として浮かび上がる。なぜなら、「機能的」と表現される、経済成長の豊かさを人々が享受していた1970年代

の社会状況において黙示録的空間を見出すためには、混沌や混乱を生む悪魔の存在を描くことが必要だったと考えられるからである。さらに、「キリガミロイ」の書かれた1978年から1979年の期間にはイラン革命やカンボジアによるベトナム侵攻など世界情勢を変える出来事が頻発している点も合わせて考慮したい。例えば、小森はイラン革命の他、朴正熙大統領暗殺やソ連のアフガニスタン侵攻を含めて、1979年を「それまで安定的かつ冷戦構造的なシステムがすべて崩れた年」と統括している（成田、2009年、43頁）。これらの社会状況の揺らぎを踏まえるならば、「キリガミロイ」で汚鬼が主要人物として登場する背景には「ヨレハ記」の完成度を高める意図だけでなく、キリスト者作家・小川の時代認識があると言えよう⁽²²⁾。なぜなら、悪魔をモチーフとする汚鬼が「キリガミロイ」で起こす混乱は同時代の状況の揺らぎと重なっているからである。「『血と幻』に書かれた出来事、そこに生きる人々の思いは、現代との照応を探られている」という勝呂の指摘はこの汚鬼の諸相を捉えたものだと言えるだろう（勝呂、2009年、89頁）。

このように「キリガミロイ」で汚鬼が主要人物として登場する背景には「ヨレハ記」の構想を強化する意図と「キリガミロイ」の書かれた時代状況に潜む変調が挙げられる。そして、「キリガミロイ」に登場する汚鬼を分析するとき、小川は聖書的な悪魔の理解をもとに汚鬼を作り出し、この汚鬼の描写を通して悪魔の特徴を暴き出していると考察できる。この点を検討するにあたり、はじめに聖書における誘惑物語の文学形式を参照して「キリガミロイ」のテーマを考察し、また、聖書的な悪魔の理解を整理したい。この上で、小川はこの汚鬼を通していかに悪魔の特徴とその策略を暴き出しているか、パロイのプライドと嫉妬を中心に考察する。

III. 「キリガミロイ」に登場する汚鬼

1. 「キリガミロイ」のテーマと悪霊、悪魔に関わる神学的な議論

「キリガミロイ」は聖書における誘惑物語と文学形式が似ており、誘惑をテーマにした物語であると考えられる。アメリカの文学研究者リーランド・ライケン

は聖書における誘惑物語を同書の試練物語の下部ジャンルに位置づけている。そして、誘惑の被害者、誘惑者、そして被害者が誘惑にさらされる展開という3つを誘惑物語の主要な構成要素とした上で、特徴的な原則を次のように分析している⁽²³⁾。

- (1) 誘惑の概念は試練と誘惑という2つの要素により構成される。
- (2) 誘惑物語は被害者が誘惑される内容の悪質性が明白であるという印象を読者に与える。換言すれば、誘惑は善と悪の間における葛藤の世界観において起こる。
- (3) 誘惑物語は人間が良いものを選び、悪を拒む能力があることを前提としている。
- (4) すべての誘惑物語には被害者を誘惑する外的な行為者が含まれるが、この行為者は被害者を誘惑に強制して取り入れることができない。最終的な判断は被害者によってなされる。
- (5) (4) と関連して、誘惑に陥る必須要件は自制心の喪失、警戒心のゆるみ、あるいは決意の弱体化である。

(Ryken、2014年、194頁、本稿筆者訳)⁽²⁴⁾

ライケンの分析する誘惑物語の主要な構成要素は「キリガミロイ」にも認められる。すなわち、主人公のパロイ（被害者）が汚鬼（誘惑者）から誘惑を受けて、双子の兄弟であるキリガミロイを殺害するか葛藤する（被害者が誘惑にさらされる展開）という大筋を見出すことができる。また、特徴的な原則も適合しており、特に（4）と（5）は物語におけるパロイの葛藤を考察するにあたり有効である。詳しい分析は次節に譲るが、聖書における誘惑物語の主要な構成要素と特徴的な原則が「キリガミロイ」に該当することが確認できる。このことから、「キリガミロイ」は物語全体を通して誘惑がテーマであり、特に汚鬼がパロイを誘惑する事件に焦点を当てていると分析できる。

汚鬼は「キリガミロイ」における誘惑者であり、汚鬼という名称はラゲ訳『新約聖書』の「悪魔」の解説から採られているため、汚鬼のモチーフとして悪魔が考えられる。ただ、同解説で悪魔はサタンと換言されており、また、共観福音書では悪霊の頭としてサタンが登場するなど、聖書における悪魔の概念には他の概念と重なる部分がある⁽²⁵⁾。このため、本稿は汚鬼の分析に有効な神学的な議論を選択的に取り上げ、特に聖書における悪霊とサタンに関する議論を参照したい。

はじめに、悪霊は旧約聖書で十分に定義されておらず、隠喩的かつ曖昧な概念である。例えば、トゥエルプトゥリーは「悪霊に相当するヘブル語は一つもみられず、悪霊を意味すると思われる用語はその意味を定義するには不十分に表現されている」と指摘している (Twelftree, 2009年、91頁、本稿筆者訳)。この一方で、新約聖書における悪霊はサタンを頭とする超自然的な悪なる力で、サタンと同様に神に敵対する存在である。これは共観福音書におけるキリストの悪霊追放やパウロ書簡で指摘される悪霊の描写に表れている。

また、サタンは聖書で明確な定義がみられず、また、旧約聖書と新約聖書で概念に違いがある。例えば、旧約聖書におけるヘブライ語の一般名詞「サタン」は「敵対者」ないし「告発する者」を意味するが、神の支配に敵対する悪を体現した存在ではない⁽²⁶⁾。むしろ、旧約聖書においてサタンはあくまで神の支配下にあり、神の僕として自身の役割を全うする。この典型的な例がヨブ記に登場するサタンであり、サタンは「神に敵対する者ではなく、天の構成員の一人」として地上からヨブを見出し、神の承認のもとで災いを下す (Conrad, 2009年、113頁、本稿筆者訳)⁽²⁷⁾。これに対して新約聖書におけるサタンは悪魔、あるいは悪霊の頭、ベルゼブルという名称と互換可能となり、神に敵対する勢力の権化である⁽²⁸⁾。このように旧約聖書から新約聖書にかけてサタン像が変化する背景には原始キリスト教時代における善悪を二元化する終末論的風潮があり、この思潮に影響を受けて神の敵対者としてのサタン像が形成されたと考えられる⁽²⁹⁾。

そして、サタンには主に2つの特徴が挙げられる。1つ目は神の敵対者として人を罪に誘惑し、人が神の意図から離れるように唆すことである⁽³⁰⁾。これは共

観福音書で描かれる荒野の誘惑やキリストがペトロを叱責する場面に表れている。また、コンラッドは「マルコによる福音書4章のたとえ話において、サタンは一人ひとりに神の言葉が蒔かれると同時にそれを奪い去る者として理解されている」と指摘する（Conrad、2009年、114頁、本稿筆者訳）。神の言葉、すなわち、聖書の言葉はキリスト教信仰において中心的な位置を占めるため、人から神の言葉を奪うサタンは本質的に神の敵対者であり、人を神の意図から離そうとする特徴を持っていると考えられる。

さらに、サタンの特徴の2つ目に人を欺くことが挙げられる。この点は新約聖書でサタンの類義語と理解できる悪魔の原語が「偽りの告発者」(false accuser)を意味する点にも表れている(Twelftree、2009年、117頁、本稿筆者訳)。また、「悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである」という聖書箇所にも悪魔が人に虚像を与えて欺くことを本質とすることが示されている(ヨハネ、8章44節)⁽³¹⁾。サタンの虚偽は悪質なものを善と偽る場合もあり、アメリカの牧師ナーゲルはキリストが荒野で受けた誘惑を取り上げて「イエスとサタンの物語は悪が大いに良くみえることがあるという注意を喚起している」と指摘している(Nagel、1999年、36頁、本稿筆者訳)⁽³²⁾。この他、「日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。悪魔にすきを与えてはなりません」は悪魔の働きとして人間の内にすでに存在するものを悪化させることを示している(エフェ、4章26-27節)。詳しくは次節で述べるが、小川はこれらのサタンの特徴を踏まえて汚鬼を作り出し、この汚鬼を通して「キリガミロイ」で悪魔の特徴とその策略を具体的に明るみに出していると分析できる。

このようにサタンは本性から神に敵対し、人を欺き、神の意図から人を離れさせようとする特徴を持っている。そして、「キリガミロイ」における誘惑者と考えられる汚鬼を分析するとき、特にライケンの分析の中で(4)が示唆的である。なぜなら、(4)は「外的な行為者」、すなわち、誘惑者が被害者に働きかけるとき、被害者が自発的に悪質性を選択するように仕向ける策略があることをほのめかしているからである。実際、誘惑がテーマである「キリガミロイ」では汚鬼がパロ

イを誘惑する様子が細かく描写されている。そこで、次に「キリガミロイ」に登場する汚鬼を通して示されている神学的な要素を検討したい。

2. 「キリガミロイ」に登場する汚鬼とその策略

a. 汚鬼の誘惑

「キリガミロイ」はキリガミロイの双子の兄弟であるパロイの視点から語られている。パロイは語り手であり、また、物語にも登場するため、いわゆる「登場人物と統合された語り手」(character-bound narrator)として出来事を自叙伝的に語る。バルは「登場人物と統合された語り手は、たいてい彼／彼女〔語り手〕に関する真実な事実を物語るか、あるいは、これを示唆する」と指摘している (Bal、2017年、13頁、本稿筆者訳)。このことから、パロイの語りは単なる出来事の叙述ではなく、パロイの身に起こった事件の中から真実なるものを伝える意図で構成されていると言えよう。この物語の中で主要人物として登場するのが汚鬼であり、パロイの語りは汚鬼との出会いとその意味を説き明かすことに集中していると考えられる。

物語はパロイとキリガミロイが少年期に石蹴りをして遊ぶ場面から始まる。ここでパロイは「キリガミロイと俺は双児だ。お袋の乳房を奪い合いながら育った仲だ」と語り始め、パロイは「赤く丸々と太っていた」元気な子供であり、キリガミロイは「青黄色で、日陰の蚊みみたいな声」を出す弱々しい子供であると述べる (「キリガミロイ」、373頁)。この描写には語り手・パロイの価値判断が投影されていると考えられる。つまり、パロイは幼い頃からキリガミロイに対して競争意識があり、兄としてのプライドが高い人物であると言える。しかし、このパロイのプライドは20歳前後のキリガミロイの変貌によってひどく傷つけられることとなる。弟のキリガミロイが司祭のように振る舞い始め、これに人々が同調するようになったからである。キリガミロイは「私は天から言葉を頂いた。血筋の司祭などとは違う」と断定的な言葉を口にするようになり、ひ弱だった昔日の面影がなくなる (「キリガミロイ」、377頁)。一方で、パロイはキリガミロイの予言者

のような言動が許せず、「石屋の息子にそんなことを言う権利があるのか」と父親に訴えるが、パロイの他にキリガミロイの変貌に注意を払う者はいなくなる（「キリガミロイ」、376頁）。プライドは嫉妬に変わり、苛立ちや混乱が絶え間なくパロイの感情を捉え始めた時、このパロイに近付き、物語の展開を決定的に変える登場人物が汚鬼である。次の汚鬼の登場場面には、誘惑者としての汚鬼が象徴的に示されている⁽³³⁾。

俺は椰子酒を飲みながら、燕が帰って行くのを見ていた…… [略] ……
 その間ずっと、キリガミロイのことが頭を離れず、奴はまるでこびりつ
 いた油虫だった。
 ——汚鬼にでも相談してみようか、と俺がいうと、そいつが入って来た。
 そいつは前々から外にいたのだ。怖ろしく背の高い痩せた男で、人間が
 いるというよりも、つむじ風で灰色の布が立ち上がって、振じれ加減で
 ふらついていた格好だった。俺はそいつを呼んだのか。

（「キリガミロイ」、377頁）

この場面で汚鬼は常に誘惑する機会をうかがってパロイの家の外で待ち伏せている。そして、パロイが嫉妬心に駆られて自暴自棄を起こし、気を許した途端に汚鬼がパロイの部屋に入ってくる。この汚鬼の行為は汚鬼がパロイの内面に侵出し、誘惑を開始したことを意味すると換言できるだろう。このように、汚鬼はパロイの幻想ではなく、誘惑者として「キリガミロイ」に登場する。前述したライケンの分析と合わせて考えるならば、汚鬼は「被害者を誘惑する外的な行為者」であり、悪魔を表象する物語内の主要人物である。

また、ライケンの分析と物語の筋を合わせて検討するとき、特徴的な原則（4）と（5）が「キリガミロイ」においてはっきりと表れていることが分かる。例えば、（4）「最終的な判断は被害者によってなされる」に関して、パロイははじめ汚鬼の誘惑に消極的な姿勢を示し、抵抗するものの、最終的に汚鬼に屈服して自発的

にキリガミロイを殺害する⁽³⁴⁾。また、(5)「誘惑に陥る必須要件は自制心の喪失、警戒心のゆるみ、あるいは決意の弱体化」に関して、汚鬼が登場する前に描かれるキリガミロイの変貌に伴うパロイの苛立ちや自暴自棄な生活が該当する。この他、汚鬼の誘惑に対するパロイの抵抗も(2)や(3)の原則に沿って考えることができる。このように誘惑物語における特徴的な原則が「キリガミロイ」に適用できることから、「キリガミロイ」は誘惑をテーマにした物語であり、また、聖書における悪魔が汚鬼のモチーフとして鮮明に浮かび上がってくる。そして、「キリガミロイ」に登場する汚鬼を通して示されている神学的な要素を検討するにあたり、特徴的な原則(4)がいかに物語内で表れているかに着目したい。物語の筋に即して述べるならば、汚鬼の誘惑に抵抗する姿勢を見せるものの、最終的にキリガミロイの殺害を決意するパロイの姿である。なぜなら、このパロイの姿に着目することは「キリガミロイ」に登場する汚鬼を通して提起されている神学的要素を検討する上で重要な問いを導き出すからである。すなわち、汚鬼はどのようにパロイに働きかけて、キリガミロイの殺害を自発的に選択させるのか、すなわち、汚鬼の策略とは何か、という問いである。

そこで、次項では汚鬼がパロイにもっとも接近する物語の中盤の場面に焦点を当てて、汚鬼の策略を検討したい。

b. 汚鬼の策略

汚鬼は誘惑に消極的なパロイを荒野にあるシフの泉という場所に連れて来る。そして、泉の冷たさに触れて冷静さを取り戻したパロイが「齒を食いしばっても戻るぞ」と意気込んで汚鬼の誘惑に抵抗する姿勢を見せているところにやって来て、汚鬼は「キリガミロイを殺せなかったな」と語りかける(「キリガミロイ」、381頁)。さらに、ここで汚鬼はパロイがキリガミロイを殺害したい気持ちに駆られて石を拾い上げた場面を思い起こさせて、パロイの気を引こうとする⁽³⁵⁾。このとき、汚鬼がパロイに「キリガミロイを殺せなかったな」と語りかけ、また、パロイが「思わず応えていた」と反応する点は見落とせない(「キリガミロイ」、

381頁)。なぜなら、この汚鬼の一言は傷ついたプライドにパロイの意識を向けさせ、キリガミロイに対する嫉妬が再燃するように仕向けているからである。特に、この嫉妬に関して、単に兄弟間の競争意識がパロイにとって問題となっているのではないことが重要である。パロイは石屋の息子であるキリガミロイが聖職者へと変貌する背景に神の摂理を看取り、神の権威をこの変貌の背後に見出していると考えられる。このため、キリガミロイの変貌は決定的なものとしてパロイに示され、キリガミロイに対する嫉妬は神への不信や苛立ちとも関連する複雑で根深いものとなっていると分析できる。汚鬼はこのパロイの嫉妬に着目し、良い部分を悪い部分へと変化させるのではなく、悪い部分を悪化させることで誘惑に陥るように働きかけている。汚鬼の誘惑においてパロイの傷ついたプライド、また、神に対する不満や腹立ちの感情と関連したキリガミロイへの嫉妬こそ最良の材料である。

これらの点は前節で取り上げたサタンの特徴のうち、「人間の内にすでに存在するものを悪化させること」と類似している。そして、「キリガミロイ」に登場する汚鬼はこの「すでに存在するもの」としてプライドやプライドから派生する根深い嫉妬が該当することを示している。ここに、パロイの内に存する負の感情をさらに悪化させるという汚鬼の策略の1つが表れている。

さらに、汚鬼はパロイに次のように語りかける。

——いいか、これが説明だ。神はキリガミロイを特別な人間にした。その業については、お前の考えは到底追いつかない。キリガミロイ一人しか、そうされた者はいない。そうされた者はキリガミロイ一人しかいないのだから、影も一人しかいない。

——影……。

——お前のことだ。お前はキリガミロイの影だ。

(「キリガミロイ」、383頁)

この汚鬼の発言で着目されるのが「お前の考えは到底追いつかない」と「お前はキリガミロイの影だ」である。まず、前者に関して汚鬼は神を引き合いにしてキリガミロイの変貌を説く中で神に関する描写も挿入している。つまり、キリガミロイを特別な人間にするという神の決定に関して「お前の考えは到底追いつかない」と述べることで、汚鬼はパロイが神の意図を推し量ることができない存在であると断定している。これは、汚鬼が不可知な存在として神を描写していると言ってもよいだろう。たしかに、キリガミロイは「私は天から言葉をいただいた」と変貌後に述べていることから、キリガミロイの変貌が神に由来することには妥当性がある（「キリガミロイ」、377頁）。しかし、「お前の考えは到底追いつかない」はキリガミロイの発言にはみられず、汚鬼の意図的な付け足しである。しかし、この汚鬼の説く神像をパロイは深く疑うことなく受け入れる。なぜなら、不可知な存在としての神こそキリガミロイの変貌を説明する上でパロイが同意できる神についての解釈であり、パロイにとって神への不満や苛立ちを正当化できるからである。

さらに、キリガミロイの変貌を神の決定として説明することによって、汚鬼は神がパロイのプライドを傷つけた元凶であり、パロイにはまったく働きかけることがない存在であることを示唆している。このように、汚鬼は意図的に独自の神に関する描写を差し込み、苛立ちの矛先を神に向けるように促し、パロイがキリガミロイの変貌に表れている神の心を知ろうとする態度を喪失させている。ここに2つ目の汚鬼の策略が表れている。そして、この汚鬼の策略はサタンの特徴の1つである「人が神の意図から離れるように唆すこと」に関して、不可知な存在としての神、特に苦境においてまったく働きかけることがない神という認識を与えることで悪魔は人を神から離れさせようとすることを表象していると分析できる。

さらに、「キリガミロイの影」という汚鬼の発言にも注意したい。この「キリガミロイの影」とはパロイにとって屈辱的な自己の姿に他ならない。なぜなら、この自己像はこれまでパロイが描いていた兄弟関係の構図を転覆させ、兄としてのプライドを回復不能まで傷つけるからである。さらに、この自己像はキリガミ

ロイの存在の副産物としてパロイを位置付けることにより、キリガミロイが嫉妬を煽り続ける存在として現出することを意味する。先述したようにこの嫉妬には神の権威に対する不信が絡んでいる。このため、汚鬼はここで嫉妬をかきたてる格好の自己認識をパロイに提示すると同時に、神への不信を深くすることを試みていると言えよう。

そして、パロイは抵抗なくこの自己像を受け容れるが、「キリガミロイの影」を導く汚鬼の論理は「キリガミロイ」「キリガミロイの影」という二分であり、根拠がない⁽³⁶⁾。このことから、「キリガミロイの影」とはパロイを神から引き離し、自身の側に招き入れるための汚鬼の虚言だと考えられる。ここに3つ目の汚鬼の策略がある⁽³⁷⁾。この点は「人を欺く」というサタンの特徴に関して、人の自己認識に深く関わる事柄を利用して人を騙すということが示されている。嫉妬を煽り、また、神からなおざりにされていることを決定付ける「キリガミロイの影」という自己像を与えることによって、汚鬼はパロイを精神的に追い詰め、「キリガミロイ」と「キリガミロイの影」のどちらが相応しいか思考させる。この結果、パロイは自己を「キリガミロイの影」と認識し、神がこの自己像を創造したと考え、神から背を向け、キリガミロイを殺害する⁽³⁸⁾。ルイスは『基督教の精髓』(*Mere Christianity*)において「悪魔はつねに誤りを二つ抱き合わせにして——相対立するものを一組にして、世に送りこむのである。そして彼は、われわれがその二つのどちらがいつそう悪いかを考えて多くの時間を費やすことをつねに助長する」と指摘する(ルイス、1995年、282頁)。3つ目の汚鬼の策略は、悪魔の奸計について述べたルイスの指摘とも類似している。そして、「キリガミロイの影」を否定するためにキリガミロイを殺害することを決意したパロイは、これを実行する。物語の結末でキリガミロイの遺体が地に横たわる時、ここにおいて汚鬼の誘惑は達成されたと言えよう⁽³⁹⁾。

このように「キリガミロイ」に登場する汚鬼の策略を検討するとき、前章で検討した悪魔の特徴が小説における神学的要素として具体化されていることが明らかになる。「キリガミロイ」に登場する汚鬼はパロイの内にわだかまっているブ

ライドや嫉妬を悪化させ、神に敵対する気持ちを起こさせるような言葉を発言に忍ばせ、パロイに歪んだ自己像を植え付けさせている。汚鬼は狡猾な手口でパロイを誘惑する策略家だと言えよう。そして、この汚鬼の策略を通して悪魔はどのように人を誘惑するのか、悪魔の特徴が具体的に暴き出されていると考察できる。

汚鬼は「キリガミロイ」においてパロイを誘惑することに成功する策略家であり、勝利者である。パロイはキリガミロイに対する嫉妬を燃やし続け、同時にこの境遇を招いた神に反抗する。この結果、キリガミロイの血は流れ、パロイは神に背を向けた姿を残したまま物語は閉じられる。しかし、このような汚鬼を主要人物として扱うことで、小川は悪魔の諸相を丹念に描き出している。そして、汚鬼の存在は聖書系列作品に深みを与え、悪なる存在といかに向き合うかという省察へと読者を招いていると言えよう。この小品の提起するこの問題は、社会全体の変調がみられた1970年代のみならず、この混迷の度合いが一段と強まっている今日においてこそ、ますます意義があると考えられる。

結び

本稿は小川国夫の短編「キリガミロイ」を取り上げ、同短編に登場する悪魔の表象である汚鬼を分析した。特にキリスト者作家・小川がこの汚鬼を通して悪魔の特徴をいかに暴き出しているか、「キリガミロイ」にみられる神学的要素を考察した。

1章では「キリガミロイ」の分析に向けて、アメリカの文学研究者ミドルトンの研究方法を取り上げ、「マッピング機能」の特徴や課題を検討した。文学作品と教義の一致点を探るという従来のキリスト教文学研究の方法に含まれる解釈の恣意性を避けるため、ミドルトンは文学作品において神学的な要素として何が提起されているかに着目している。この研究方法は教義と一致するか否かという価値判断を離れてさまざまな作品を取り上げて神学的な要素を考察することを可能にさせる利点がある。ただ、この方法は作品外の要素を考察に含めにくいという課題がある。このため、本稿ではフェレットのキリスト教文芸批評を参考にし、

聖書系列作品における「キリガミロイ」の位置や同短編で汚鬼が主要人物として登場する背景を整理し、この上で「キリガミロイ」に登場する汚鬼を分析するという本稿の方向性を示した。

2章では聖書系列作品における「キリガミロイ」の位置を整理し、汚鬼に着目することで同短編と1970年代の時代状況との関連を考察した。なぜ汚鬼が「キリガミロイ」において主要人物として登場するのか、この問いを軸に長編「ヨレハ記」と1970年代後半の社会状況を考察し、2つの背景を検討した。1つは「ヨレハ記」で十分に表現しえなかった黙示録的空間の創出に汚鬼を活用するという創作上の小川の意図である。もう1つは時代的な背景であり、「機能的」な高度経済成長期後の社会状況にあつて黙示録的空間を見出すために混乱や混沌を生む悪魔の存在が構想されたことが挙げられる。さらに、「キリガミロイ」の執筆時期にはイラン革命をはじめ、その後の社会に大きく関わる時代状況の変化があり、汚鬼の登場には小川のキリスト教的理解に支えられた時代認識が関係している点も考察した。

3章では「キリガミロイ」に登場する汚鬼に焦点を当てて分析を行った。はじめに、アメリカの文学研究者ライケンの分析を取り上げ、聖書における誘惑物語の文学形式と「キリガミロイ」が類似していることを示し、同短編が誘惑をテーマにしていることを考察した。そして、汚鬼を通して提起されている神学的要素を検討するにあたり、悪魔に関する神学的議論のうち、特に悪霊とサタンの議論を取り上げた。この上で「キリガミロイ」に登場する悪魔の表象である汚鬼とこの登場人物がパロイを誘惑する策略を分析した。「キリガミロイ」に登場する汚鬼はパロイの内に潜む傷ついたプライドや根深い嫉妬を悪化させ、神に敵対するように仕向ける言葉を発言に挿入し、歪んだ自己像をパロイに与えて誘惑を成功させる。これらの汚鬼の策略を通して小川は悪魔の特徴を暴き出し、悪なる存在といかに向き合うかという省察へと読者を導いていることを考察した。

先行研究では聖書系列作品における重要性が指摘されつつ具体的に論じられることがなかった汚鬼に関して、本稿はミドルトンの研究手法を適用して仔細に論

じた。特に、汚鬼がどのような点で聖書系列作品に深みを与えているかについて、「キリガミロイ」をもとに具体的に提示した。本稿で示した汚鬼に関する考察は代表作『或る聖書』や『ヨレハ記』に登場する汚鬼を考える上で、今後の研究の土台となることが期待できる⁽⁴⁰⁾。聖書系列作品は重層的であり、一つひとつの作品が他の作品に連なって総体的な世界を成している。このため、他の作品に登場する汚鬼と引き合わせて考察することで、より立体的に汚鬼の姿、また、この悪魔の表象が明らかになると考えられるが、次の課題としたい。

註

* 本稿で文学作品を引用する際は題名、年数、頁数を示し、聖書の引用は略語を使用し、章節を付記する。また、本稿では……および〔 〕は本稿筆者による。この他、小川テキストのうち「キリガミロイ」は『イシュー記 新約聖書物語』の収録作品から引用し、引用する際に年数を割愛する。

- (1) 勝呂は「小川国夫の文学には、聖書系列として括ることの出来る作品群がある」と指摘し、これらを「聖書系列作品」と称している（勝呂、1995年、39頁）。以下、本稿もこの用法にならうものとする。
- (2) ミドルトンの研究方法については本稿1章を参照せよ。また、本論と関連する悪の起源の議論を以下に略述する。古代キリスト教におけるリヨンの司祭エイレナイオス（約130-約200）は悪の起源を人間の弱さに見出し、人間は成熟した存在ではなく「小さき者」の状態にあるため「欺く者によって誤った道に導かれるのも容易であった」と指摘する（マクグラス、2007年、429頁）。また、ジョン・ヒック（1922-2012）はエイレナイオスの議論を踏まえて終末論の観点から悪の問題を扱い、「悪は究極的には創造物に対する神の目的を喪失させるものと定義されなければならない」と主張する（Hick、1966年、399頁、本稿筆者訳）。ヒックは悪の脅威を認めるが、神の創造の目的から悪を捉えることで悪は神との和解と神の似姿へ向けた人間の成長の要素になると主張する。ただ、マクグラスはこのヒックの主張に対する批判をまとめて「このアプローチは単に世界の中の悪と知り合いになるように奨励するだけで、それに抵抗したり、それを克服する道徳的な手引きや刺激を与えないように思われる」と述べている（マクグラス、2010年、402頁）。この他、エイレナイオスやアウグスティヌスと異なり、神の全能性に関して根本的な再考を行って悪の問題に独自にアプローチした神学者としてカール・バルト（1886-1968）が挙げられる。
- (3) 「悪魔」の解説に「悪魔のことを悪鬼、汚鬼、サタン（反対者）とも言い、また、しばしば聖書中ではベリアル、ベルエゼブブ、アバドンの名をもって呼ばれた」とある

(聖パウロ修道会、1960年、735頁)。

- (4) このオコナーの指摘を踏まえて、ウォルシュはキリスト者作家の救済に関する考えやキリスト教の人間観と作品の深みの関連を指摘している。この点について詳しくはWalsh (2002) を参照せよ。また、オコナーは悪魔に関して「それ自体の卓越性によって見極められる知的存在としての悪」と指摘しており、「キリガミロイ」における奸智に長けた汚鬼の姿と重なる (O' Connor、2002年、167頁、本稿筆者訳)。
- (5) この他、スハーブはキリスト教文学における悪の問題はリアリズムの観点、すなわち、「迫真性」(verisimilitude) から考察できると主張している (Schaap、2002年、294頁)。また、キリスト者作家以外の作品における悪の問題をキリスト教文学の観点から取り上げた考察としてBauer (2002) を参照せよ。
- (6) この点に関して、次のルイスの言葉が示唆的である。ルイスは「悪魔に関して人間は二つの誤謬におちいる可能性がある…… [略] ……すなわち、そのひとつは悪魔の存在を信じないことであり、他はこれを信じて、過度の、そして不健全な興味を覚えることである」と注意を促している (ルイス、1995年、25頁)。
- (7) 中期の聖書系列作品以降で汚鬼が台頭する傾向を知る上で「罪の赦し」(『青銅時代』所収、1960年) とその改作「塵に」(『文學界』所収、1972年) の比較が手掛かりとなる。聖書系列作品の初期にあたる「罪の赦し」で汚鬼についての言及はみられないが、中期の作品である「塵に」で汚鬼は登場人物の間で憑き物として認識されており、語り手も物語末尾で「殺すことは汚鬼の与える眩暈だ」や「人間は汚鬼を招いて養う」と指摘するなど、汚鬼の存在が前景化している。
- (8) 現在、ミドルトンはテキサスキリスト教大学の宗教学デパートメントに所属し、キリスト教学や神学と文学を扱う講義で教鞭を執っている。以下、本項で紹介するミドルトンの分析方法はMiddleton (2008) に基づいている。
- (9) エガーズはミドルトンの研究方法について「ミドルトンはフィクションが組織神学といかに一致するか、あるいは、一致しないかを検討するという一般的なアプローチを回避している」と指摘する (Eggers、2013年、317頁、本稿筆者訳)。
- (10) この研究方法に関して、ミドルトンは英文学者のランズダウンが主張する文学の自主性に影響を受けたと述べている。文学の自主性に関してはLandsdown (2001) を参照せよ。
- (11) この考察に関してはGallagher (1989) やVeith (1990) を参照せよ。
- (12) 本稿は物語論に関してBal (2017)、Wood (2008) を参照し、「キリガミロイ」の分析では主に前者を用いる。具体的な作品分析は本稿3章を参照せよ。
- (13) 例えば、ランディンは『失楽園』(Paradise Lost) に関して「文学的な伝統に関する事柄や英文学史の知識はこの詩を読み解く上で欠くことのできない背景を与えてくれ

るだろう」と指摘し、これらの知識がアダムとイブの墮落や普遍的な罪の問題という同作品の主題に迫る上で意義があるとしている (Lundin、1989年、79頁、本稿筆者訳)。

- (14) 例えば、ミドルトン『スキャンダル』(1986年、新潮社)を取り上げて「勝呂は日本の文脈においてカトリック信仰を維持するため奮闘している」と述べるが、この「奮闘」は具体的に論じられない (Middleton、2015年、65頁、本稿筆者訳)。しかし、遠藤 (2005) や川島 (2016) の論考にみられるように遠藤の伝記的情報を参考とすることは勝呂の「奮闘」を読み解く上で有益だと言える。また、テキスト外の要素のうち、日本近現代文学史やユングの理論と組み合わせる勝呂を分析する例としてWilliams (1999) を参照せよ。
- (15) このフェレットの主張の背景にはキリスト教文芸批評には学問の場と教会という2つの「解釈共同体」が含まれるという考えがある。「解釈共同体」に関してはFish (1980) を参照せよ。
- (16) 「ヨレハ記」は1976年から2年間『すばる』に連載され、小川の死後『ヨレハ記——旧約聖書物語』(ぶねうま舎、2012年)として刊行されている。
- (17) 『或る聖書』に登場する汚鬼を小説の構造と合わせて分析した論考として櫻井 (2018) を参照せよ。
- (18) この点に関して「神に眠る者」20章を参照せよ。
- (19) 小川は「ヨレハ記」の連載後に「私は七百枚ほどで書き上げ、通読してみたが、甚だ不満であった」と述べている (小川、2012年、582頁)。
- (20) 例えば、小川は悪霊に憑かれた男が登場するルカによる福音書8章の場面と合わせて黙示録的空間について言及している。また、「ヨレハ記」で汚鬼は登場人物によって憑き物として認識されており、裏切りや誘惑に関する言葉と合わせて言及されている。例えば、ヨレハはマジに向かって「悟りがいいな。その悟りはどこから来た。お前は汚鬼の巣だ。裏切るがいい」と語る (『硫黄 ヨレハの死』、2012年、349頁)。このように「ヨレハ記」の登場人物は汚鬼の存在を認めているが、汚鬼が登場人物として作品内に姿を現すことはない。
- (21) 「ヨレハ記」は「旧約聖書のかたわらに別の物語を書くという方針」のもとに執筆されている (小川、1995年、524頁)。ただ、本稿3章で指摘するように旧約聖書における悪魔像は曖昧であるため、小説の要素として活用するには工夫が必要である。そこで、小川は新約聖書における誘惑物語の文学形式を踏まえて「キリガミロイ」を構想することで悪魔像を明確にし、汚鬼を主要人物として登場させたと考えられる。
- (22) これは小川が属する「内向の世代」の特徴が「キリガミロイ」に表れているとも言える。石川は柄谷行人の批評を踏まえて「内向の世代」の作家について「彼らは、高度経済成長期のうかれた世相に流されたり卑近な日常に甘んじているのではなく、自分たちが直目している内的な危機を明確にし、「方法的懐疑」によって、そこから外部

へと通じる道を探っていた」と述べている（石川、2012年、9頁）。伊藤（2006）のように「内向の世代」の特徴は聖書系列作品にあまりみられないと分析する論考もあるが、「キリガミロイ」で汚鬼が主要人物として登場する背景は「内向の世代」の模索と重なるところがある。「内向の世代」の作家論に関して古屋（1998）を参照せよ。また、「内向の世代」の模索について論じたものとして秋山（1973）の2つの論考と上田（1973）を参照せよ。この他、「内向の世代」の作家が同文学傾向を語ったものとして「文学の責任——「内向の世代」の現在」を参照せよ。

- (23) 神学者のカーターは新約聖書で誘惑は罪へと唆される状態と神の意図に不誠実な状態であると主張し、「信仰者は自分自身の欲望（1ペト、1章14節）、悪魔（1コリ、7章5節、1テサ、3章5節）不特定源（ガラ、6章1節）によって唆される」と指摘している（Carter、2009年、516頁、本稿筆者訳）。ライケンは誘惑者の具体例を提示していないため、本稿ではカーターの指摘を参照し、特に誘惑者としての悪魔に着目したい。
- (24) (1)における試練とは被害者の誘惑に抵抗する能力が試されることを指し、誘惑とは誘惑者が禁止事項を魅力的なものとして被害者に差し出し、唆すことを指している。また、ライケンは(4)の聖書箇所として「むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます」を挙げている（ヤコ、1章14節-15節）。この「誘惑」（πειράζεται）と同書箇所で使用される「試練」は同じ語源であるが、訳出が異なる点には神は人を試すが誘惑しないことが示されている。ライケンはこの聖書箇所を引用することで神は誘惑者でないことと「自分自身の欲望」が誘惑者に含まれることを示唆している。
- (25) 『キリスト教神学基本用語集』（*Essential Theological Terms*）の「悪魔」の項目には「サタン」の解説を参照するよう指示があるのみである。また、『新キリスト教組織神学事典』では「悪魔」の項目において「サタンとはヘブライ語で「傍らで告発する者」のことで、人を試み、そそのかし、わざと妨げ、行状を訴える者となるが、決して神から自立した悪の原理というものではない…… [略] ……七十人訳ではこれらをすべてギリシア語でディアボロス（反抗する者）と訳し、これがdevilの語源となった」と解説されている（芳賀、2018年、20頁）。
- (26) 旧約聖書でサタンは歴代誌上21章1節の用例を除いて定冠詞を伴って使用されており、「天にいる存在（神の子ら）によって制定された役割」を意味する一般名詞である（Conrad、2009年、113頁、本稿筆者訳）。
- (27) これは聖書学者がしばしば指摘するヨブ記に登場するサタンの特徴である。例えば、並木は「神はヨブの信仰の確かさをサタンに証明するために、サタンがヨブに打撃を二度にわたって下すことを許可した」と述べている（並木、2013年、215頁）。
- (28) これはサタンが神と対等な力を持つ勢力であることを意味しない。例えば、ゴンザレ

スは「サタンとその力を論じる際にキリスト教の伝統は概して、二つの極端を避けようとしてきた。一方では、サタンの存在は、一つは善で一つは悪という二つの永遠の原理があるかのように二元論的に理解されるべきではないことを極めて明確に示してきた」と指摘する（ゴンザレス、2010年、102頁）。

- (29) アメリカの歴史学者パージェル（1943-）はエッセネ派に代表される善悪の宇宙論的な対立という思潮が原始キリスト教に影響を与えた点について、特に他者を悪魔化することが原始キリスト教の形成に寄与した点を指摘している。この点について詳しくはPagels（1995）を参照せよ。また、英文学者のフォーサイス（1944-）は原始キリスト教と同時代の神話には敵対者に個人的な名称を与える習慣があることを挙げ、原始キリスト教はこの習慣にならい他者一般をサタンと称することで、その名称自体が原始キリスト教の敵対者を表す固有名詞になったと指摘する。詳しくはForsyth（2003）を参照せよ。
- (30) 本稿は「キリガミロイ」に登場する汚鬼の分析に必要な神学的な議論を選択的に取り上げるため、人を罪に誘惑する点に関するサタンの特徴の詳述を割愛する。
- (31) この聖書箇所に関して、宗教学者のウレイと旧約聖書学を専門とするモブリーは旧約新約間の時代に宗教的な作家が他の宗派を悪魔化して記述した傾向が反映されていることを指摘している。ウレイとモブリーによる詳しい解説はWray, Mobley（2005）を参照せよ。この他、サタンに関する歴史的な考察についてMaxwell-Stuart（2008）を参照せよ。
- (32) 人を欺くというサタンの特徴は人間の罪の責任をサタンに転嫁することにつながる。むしろ、ナーゲルが指摘するように荒野の誘惑の場面は誘惑に抵抗し得る力が信仰に備わっており、人間にこの力を用いることが要請されていることを示している。この点について詳しくはNagel（1999）を参照せよ。
- (33) この場面は聖書におけるカインとアベルの物語にみられる罪の描写と類似している。すなわち、同物語で罪は「もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか…… [略] ……罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める」と描写されている（創世記、4章7節）。カインとアベルの物語で「キリガミロイ」と同様に兄弟間の嫉妬が原因である殺人事件が起こるため、「キリガミロイ」の構想に同物語が関わっている可能性が考えられる。
- (34) パロイは汚鬼を警戒し、荒野へ連れて行かれる場面では町へ戻りたいという意思を口にする。また、荒野では「歯を食いしばっても戻るぞ」と自分に言い聞かせるなど、パロイは汚鬼に抵抗する姿勢を見せている（「キリガミロイ」、381頁）。
- (35) 石を拾い上げた場面とは以下の通りである。「俺の体中が暗くなった。虚ろな闇になり、いかにも汚鬼の巣になったようだった。奴の声はその洞に響き渡ったが、負けまいと汚鬼が動き始めるのが判った。そいつは遅しく、弱っている俺を力づけた…… [略] ……俺の手は扉にかう石を拾い上げていた」（「キリガミロイ」、377頁）。

- (36) パロイが疑いなく「キリガミロイの影」という自己像を受け容れ、汚鬼の言葉に耳を傾ける理由は「キリガミロイ」で神に関して語る人物が他に登場せず、あたかも汚鬼こそが神の真意を説くかのように登場するという小説の設定と関係していると考えられる。
- (37) 汚鬼の側に招き入れるという意図は前述したパロイと対話の後に「汚鬼は迎えるように立ち上がって、俺の肩を抱いた」という汚鬼の行動に象徴的に表れている（「キリガミロイ」、384頁）。また、汚鬼が「キリガミロイの影」という自己像を受け容れたパロイに「影は自分では消えることもできない」と語り、キリガミロイを殺害するように仕向け、罪を犯させようとするにも表れている（「キリガミロイ」、383頁）。ルイスは『悪魔の手紙』（*The Screwtape Letters*）で老悪魔に「われわれにとって人間は先ず第一に食物である……[略]……われわれの目的は、彼の意志をわれわれの意志の中に吸収し、彼の犠牲においてわれわれ自身の存在の幅を広げることである」と語らせている（ルイス、1995年、63頁）。汚鬼の行動はこのような悪魔の意図を象徴的に表しているとも言える。
- (38) 汚鬼との対話が終わった後、パロイは「神は生もうとするものについては考えるだろうが、そいつが生れた結果、どんな具合に影が生れるかってことまでは、考えないのだろう。俺のなかにとぐろを巻いている想いは、神も知らないことだ」と語る（「キリガミロイ」、384頁）。
- (39) 「キリガミロイ」では示唆的に描写されるが、「棗椰子の林」ではキリガミロイの死が詳しく描写されている。
- (40) 例えば、『或る聖書』に登場する汚鬼は主人公ユニアを誘惑するが、小説末尾に登場する〈あの人〉の弟子の証しを聞くことでユニアは〈あの人〉への信仰に立ち返るため、結果として誘惑は失敗している。ここには汚鬼の誘惑を断ち切る上で〈あの人〉の言葉が重要な役割を果たしており、小川は悪魔の誘惑を退ける手掛かりを提起していると考えられる。具体的な考察は別稿に譲るが、この手掛かりを検討する上での示唆的な聖書箇所を挙げておく。「悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」（エフエ、6章11-12節）。

参考文献

〈小川テキスト〉

『小川国夫全集 6』、小沢書店、1991年

『小川国夫全集 7』、小沢書店、1993年

『小川国夫全集 10』、小沢書店、1995年

『ヨレハ記 旧約聖書物語』、ぶねうま舎、2012年

『イシュア記 新約聖書物語』、ぶねうま舎、2014年

〈その他〉

秋山駿「現代文学と内向の世代」、『三田文学』第60巻2号、三田文学会、1973年、24-36頁
———.「新世代の作家たち——内向の世代について」、『国文学 解釈と鑑賞』第38巻6号、至文堂、1973年、6-10頁

石川巧『高度経済成長期の文学 ひつじ研究叢書〈文学編〉4』、ひつじ書房、2012年

伊藤氏貴「石と傷——小川国夫における「内向」の可能性」、『国文学 解釈と鑑賞』第71巻6号、至文堂、2006年、56-64頁

岩隈直訳『希和对訳脚注つき新約聖書 12 公同書簡（上）』、山本書店、1986年

———.『増補改訂 新約ギリシャ語辞典』、教文館、2008年

上田三四二「「内向の世代」考」、『群像』第28巻4号、講談社、1973年、242-252頁

上野千鶴子、小森陽一、成田龍一「ガイドマップ60・70年代」、『戦後スタディーズ 2——60・70年代』、岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編、紀伊国屋書店、2009年、9-45頁

遠藤祐「『スキャンダル』の語るもの——絶対の〈悪〉は在り得たか」、『学苑』第780号、昭和女子大学近代文化研究所、2005年、1-27頁

黒井千次、後藤明生、坂上弘、高井有一、田久保英夫、古井由吉、三浦雅士「文学の責任——「内向の世代」の現在」、『群像』第51巻3号、講談社、1996年、118-152頁

川島秀一「悪という深淵——『スキャンダル』」、『遠藤周作〈和解〉の物語』、和泉書院、2016年、278-296頁

川西政明「1970年以後の文壇——「内向の世代」を中心に」、『日本文学から世界文学へ 新・日本文壇史 10』、岩波書店、2013年、206-256頁

共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳』、日本聖書協会、1987-1988年

ゴンザレス、フスト・L、鈴木浩訳『キリスト教神学基本用語集』、教文館、2010年

櫻井遼太「名もなき証人の役割——小川国夫『或る聖書』の複層的構造の一考察」、『ICU比較文化』第50号、国際基督教大学比較文化研究会、2018年、23-61頁

サンケイ新聞「文化」、1977年4月9日、夕刊5頁

勝呂奏「小川国夫「ユニアの旅」論——聖書系列作品の原点」、『キリスト教文学研究』第12号、日本キリスト教文学会編、1995年、39-48頁

———.「小川国夫と聖書系列作品——短編集『血と幻』を中心に」、『国文学 解釈と鑑賞』第74巻4号、至文堂、2009年、84-89頁

———.『評伝 小川国夫 生きられる“文士”』、勉誠出版、2012年

———.「解説 〈あの人の原像〉」、『イシュー記 新約聖書物語』、ぶねうま舎、2014年、539-551頁

並木浩一『ヨブ記の全体像 並木浩一著作集 1』、日本キリスト教団出版局、2013年

芳賀力「悪魔」、『新キリスト教組織神学事典』、東京神学大学編、教文館、2018年、20-22頁

古屋健三『「内向の世代」論』、慶応義塾大学出版会、1998年

マクグラス、アリスター・E、古屋安雄監訳『キリスト教神学資料集 〈上〉』、キリスト教新聞社、2007年

———.、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』5版、教文館、2010年

ルイス、クライブ・S、蜂谷昭雄、森安綾訳『悪魔の手紙 ルイス宗教著作集 1』2版、新教出版社、1995年

———.、柳生直行訳『キリスト教の精髓 ルイス宗教著作集 4』2版、新教出版社、1995年

ラゲ、エ『新約聖書』、聖パウロ修道会、1960年

Bal, Mieke. *Narratology: Introduction to the Theory of Narrative*. 4th ed., University of Toronto Press, 2017.

Bauer, Susan Wise. “Three Faces of Evil: Christian Writers and the Portrayal of Moral Evil.” *The Christian Imagination: The Practice of Faith in Literature and Writing*, edited by Leland Ryken, Shaw Books, 2002. pp. 299-312.

Carter, Warren. “TEMPT, TEMPTATION.” *The New Interpreter’s Dictionary of the Bible*, vol. 5, edited by Katharine Doob Sakenfeld, Abingdon Press, 2006-2009. p. 516.

Conrad, Edgar W. “SATAN.” *The New Interpreter’s Dictionary of the Bible*, vol. 5, edited by Katharine Doob Sakenfeld, Abingdon Press, 2006-2009. pp. 112-116.

Eggers, Paul. “Book Review: Theology after Reading: Christian Imagination and the Power of Fiction.” *Christianity and Literature*, vol. 62, no. 2, 2013, pp. 317-320. <http://doi.org/10.1177/014833311306200221>. Accessed 2 August 2018.

Ferretter, Luke. *Towards a Christian Literary Theory*. Palgrave Macmillan, 2003.

Fish, Stanley. *Is There a Text in This Class?: The Authority of Interpretive Communities*. Harvard University Press, 1980.

- Forsyth, Neil. *The Satanic Epic*. Princeton University Press, 2003.
- Gibson, Alexander Boyce. *The Religion of Dostoevsky*. Westminster Press, 1973.
- Hick, John. *Evil and the God of Love*. Harper and Row, 1966.
- Lansdown, Richard. *The Autonomy of Literature*. Palgrave Macmillan, 2001.
- Lundin, Roger. and Gallagher, Susan V. *Literature through the Eyes of Faith*. Harper and Row, 1989.
- Middleton, Darren J. N. *Theology After Reading: Christian Imagination and the Power of Fiction*. Baylor University Press, 2008.
- . “Endo and Green’s Literary Theology.” *Approaching Silence: New Perspectives on Shusaku Endo’s Classic Novel*, edited by Darren J.N. Middleton., and Dennis Mark W., Bloomsbury Academic, 2015. pp. 61-75.
- Nagel, Myra B. *Deliver Us from Evil: What the Bible Says about Satan*. United Church Press, 1999.
- O’Connor, Flannery. “On Her Own Work.” *Mystery and Manners: Occasional Prose*, edited by Sally and Robert Fitzgerald, Farrar, Straus & Giroux, 1979. pp. 107-118.
- . “Novelist and Believer.” *The Christian Imagination: The Practice of Faith in Literature and Writing*, edited by Leland Ryken, Shaw Books, 2002. pp. 160-167.
- Pagels, Elaine. *The Origin of Satan*. Random House, 1995.
- Maxwell-Stuart, P. G. *Satan: A Biography*. Amberley Publishing, 2008.
- Ryken, Leland. “Thinking Christianly about Literature.” *The Christian Imagination: The Practice of Faith in Literature and Writing*, edited by Leland Ryken, Shaw Books, 2002. pp. 23-34.
- . *A Complete Handbook of Literary Forms in the Bible*. Crossway Books, 2014.
- Schaap, James. “When a Spider Is Only a Spider.” *The Christian Imagination: The Practice of Faith in Literature and Writing*, edited by Leland Ryken, Shaw Books, 2002. pp. 281-297.
- Twelftree, Graham H. “DEMON.” *The New Interpreter’s Dictionary of the Bible*. vol. 2, edited by Katharine Doob Sakenfeld, Abingdon Press, 2006-2009. pp. 91-100.
- Veith, Gene Edward, Jr. *Reading Between the Lines: A Christian Guide to Literature*. Crossway Books, 1990.
- Walsh, Chad. “The Advantages of the Christian Faith for a Writer.” *The Christian Imagination: The Practice of Faith in Literature and Writing*, edited by Leland Ryken, Shaw Books, 2002. pp. 169-175.
- Williams, Mark B. *A Literature of Reconciliation*. Routledge, 1999.

Wood, James. *How Fiction Works*. Farrar, Straus & Giroux, 2008.

Wray, T. J. and Mobley, Gregory. *The Birth of Satan: Tracing the Devil's Biblical Roots*. Palgrave Macmillan, 2005.

The Strategy of *Okī*: A Study of Ogawa Kunio's "Kirigamiroi"

SAKURAI, Ryota

This paper examines Ogawa Kunio's (1927-2008) short story titled "Kirigamiroi" (Printed in *Blood and Vision*, 1979), focusing on the analysis of Christian imagination coming from the depiction of *Okī* (汚鬼, 'The devil') in the story. "Kirigamiroi" is considered as one of the Ogawa's Bible-based story series. *Okī*, whose motif attributes to the Devil in the Bible, appears as the main character in the story. The previous studies have pointed out the importance of *Okī*'s role in the series. However, there is even more to be explored regarding the symbolism of *Okī*. Therefore, by examining how the story speaks to the theological issue, this paper draws theological meanings of the Devil from the depiction of *Okī*, exploring the role of *Okī* in the story as well.

The first chapter of this paper summarizes Middleton's approach of examining the theological meanings in fiction. His approach is first to examine fiction in its terms and then determines how novel informs theological issue. Rather than using the conventional method of seeing how novels fit or do not fit into a systematic theology and sorting the characteristics into those issues, this approach enables opening up the theological discussion widely. However, this approach may overlook the elements outside of the text as its analysis heavily draws on Narratology, a study centering on story elements. By referring to Ferretter's Christian literary theory, this paper augments Middleton's approach to determine not only the theological meanings about the Devil from the depiction of *Okī* but also social and Ogawa's work context in which *Okī* involved.

Discussing the elements outside of "Kirigamiroi," the second chapter explores the following question: why was *Okī* the main character since the middle of the Bible-based

story series? In comparison to “A Chronicle of Yoreha” (1976-1978) and “A Date Forest” (1984), “Kirigamiroi” can be featured as the first story in which an opposition between people of God and that of who succumbs to *Oki* becomes obvious. This opposition strengthens an apocalyptic worldview in the series and resonates with social uncertainty in the late 1970s. This paper determines *Oki* as the character whose role is to make chaos by enticing people into sin, which also implies Ogawa’s reflection on the social situation in the late 1970s. *Oki* embodies these concepts of apocalypticism and social unrest while simulating the role of the Devil in the story “Kirigamiroi”.

The third chapter examines how “Kirigamiroi” cautions about the Devil through the depiction of *Oki*. Resembling the tempt story in the Bible, “Kirigamiroi” shares the common story type’s elements and features temper as *Oki*. *Oki* tempts ‘Paroi’ (パロイ, ‘Paroi’) to kill his brother ‘Kirigamiroi’ (キリガミロイ, ‘Kirigamiroi’), employing smooth tongue, a strategy for tempting *Paroi*. *Oki* deceives *Paroi* by betraying himself falsely, which leads to *Paroi* being enticed to disregard God and aggravates *Paroi*’s pride towards ‘Kirigamiroi.’ Through depicting the strategy of *Oki* in detail, “Kirigamiroi” speaks to the theological issue pertaining to the Devil and bring its masked work to light.

In conclusion, “Kirigamiroi” is the oeuvre which effectively embodies biblical ideas of the Devil into the depiction of *Oki* and exposes its strategy for tempting human beings. Also, the chaos made by *Oki* in the story resonate social situation in the 1970s and deepens the apocalyptic worldview. Employing profound Christian imagination, Ogawa’s “Kirigamiroi” stimulates theological reflection about the Devil and invites readers to ponder the theological thought on the Devil’s work both in fiction and reality.